



2022年度 県教委確定交渉について

10月31日（月）に始まった県教委との秋の確定交渉は、県職連の総務部長交渉（第1回10/26日、第2回11/4、最終回11/11）と並行して行われ、11月9日の第2回交渉を経て、11月21日（月）14:40より、最終予備交渉が行われました。

今年の確定交渉でも引き続き、最重要課題である働き方改革（多忙化過密労働の解消）、各種ハラスメントの根絶を取り上げましたが、今年は新たに来年度から行われる定年引き上げ制度の問題に取り組み、あらためて、部活動の今後のあり方や非常勤職員の報酬の問題に焦点を当てました。

特に非常勤職員の報酬については、高教組が、現行報酬が2本立て（1コマ：3490円と2840円）であることの早期解消を主張したのに対し、県教委が、報酬の2本立てを解消して付随する業務に対する支払い要件を見直し（わずかに改善）したものの、全体としては報酬が下がる職員が多く出てしまうという逆提案を出してきたため、交渉は紛糾しました。

結局、断続的に3回の予備交渉を行い、日付の変わった23日1時26分、県教委の逆提案を大筋で受け入れる、ということで妥結しました。そして同23日9時40分からの最終交渉で、県教委からの回答を了承し、今年度の確定交渉は終了しました。

以下に、最終交渉での執行委員長のあいさつ（スピーチ）を掲載します。県教委と高教組の関係性や教師としての意識について述べていますので、高教組の考え方や姿勢、活動のあり方の一端を知る上での参考としていただき、ご意見もいただければと思います。

2022年度対県教委確定交渉 最終交渉 群馬高教組執行委員長あいさつ

最終交渉にあたり、群馬高教組を代表して一言ごあいさつ申し上げます。

最後は大変苦しみましたが、何とか妥結できたことを、まずは嬉しく思います。

非常勤講師の報酬の件では、「この内容でどれだけ多くの仲間を笑顔にできるか」ということで悩みましたが、結局は「高教組としての筋を通す」ということで結論を出しました。

この間、県教委の皆様には真摯な話を重ねていただき、ありがとうございました。心より感謝いたします。

さて、私も来年3月に定年を迎えますので、38年の教員生活を振り返り、もう少しお話しさせていただきます。

昨年、この場で私は、自分の受け持つクラスの生徒のお話をさせていただきました。中学では十分に力を発揮できなかったその生徒が、今は頑張って学校に通っているというお話でした。その彼が今2年生になり、先日行われた全国障害者スポーツ大会のある競技で準優勝しました。銀メダルを手にした彼の顔はとても晴れやかで誇らしげでした。

私はそのような生徒の姿を見られることこそが、教員としての喜びだと考えています。

ぐんま教育のつどい 2023

2023年2月11日（土） 13:00～ 群馬県勤労福祉センター

群馬高教組のHP / <https://ghtu.org> こちらからどうぞ⇒



前任校は夜間定時制でしたが、その高校に入ってくる生徒たちの多くが中学では不登校でした。私のクラスに入ってきたある生徒は、中学の制服すら買わず、1日も学校には行っていないということでした。けれどもその生徒が、4年間夜の学校に通い、アルバイトもできるようになって卒業していきました。到達した地点はごく当たり前の場所かもしれませんが、その生徒にとってはものすごい成長だと思います。また、中学では年間200日以上欠席していた生徒が、3年、4年は皆勤で卒業していったということもありました。

その前は進学校にいました。その学校は当時、別日程の入試をやっていたので、第一志望の入試で失敗してしまった生徒が来ていましたが、そういう生徒たちの中から筑波に受かった、お茶の水に受かったという生徒がいました。お茶の水に行ったのは、現・浪あわせて2名でしたが、そのうちの1人は東大の大学院に進みました。これらは第一志望の高校の卒業生でも、なかなか行くことのできない進路先です。

その前は、工業高校に勤務していました。そこでは高専が不合格だったために入学してきた生徒が、3年生になって「第1種情報処理技術者試験」に合格しました。その年の高校生の合格者は全国で2人だったそうです。

今お話ししたのは、私が担任した中で、まわりの先生がちょっと驚くような結果を出した生徒たちですが、では私に特別な指導力があるかと言えば、そんなことはありません。もちろん、私以外の先生方の大きな力添えもあったでしょうが、私の感覚では、彼/彼女らが勝手に成長していったというのがいちばん近い感じです。

そして繰り返しますが、どんな学校で働いていても、生徒の成長を実感することができるなら、それこそが教員としての喜びだと思います。

内田樹という、思想家で武道家で大学教授でもあった人が、『『こうすればどんな子どもでもその才能を発揮できる』という一般的なマニュアルはない。教える側の私たちにできることは『手立てを尽くすこと』と『待つこと』だけである』とっています。

私も全く同じことを思います。

ただ、「手立てを尽くす」ということの内容について、もう少し述べさせていただけるなら、「指導」以上に大切なのは、その生徒が気持ちよく過ごせる「環境」を整えることだと思います。

GIGA スクール構想では、個別最適化された学びが提唱されていますが、ICT 機器や AI によって個別最適化された「教材」を用意することはできるでしょう。しかし個別最適化された「環境」を整えることは、当分の間は人間にしかできないことだと思います。

一人一人の生徒と向き合い、その声を聞き、生徒同士を繋ぎ、関係性を整え、その生徒が気持ちよく生活できる環境を構想する。しかし構想できても実際には、その実現こそが難しいのです。なぜなら、学校においては、しばしば学校の都合に生徒を合わせるものが優先され、生徒の都合を優先させようとする、管理職からはもちろん、時に同僚からさえも、強い抵抗があるからです。そのような抵抗は以前からありましたが、最近は特にそれが強くなったように感じられます。けれども、その困難を克服し、生徒に気持ちよく生活させることができるなら、生徒は持っている力を発揮して勝手に伸びてゆきます。

そして、自分にとって過ごしやすい環境を与えられると力を発揮できるのは生徒だけではありません。教員も全く同じです。では、その環境を整えるのは誰か。それは現場の管理職であり、教育委員会の皆さんだと思います。

どうぞこれからも、私たちの声に耳を傾け、私たちが気持ちよく仕事し、持っている力を十分に発揮できるような環境を整えることに力を尽くしていただきたい思います。

私の話は以上です。ありがとうございました。